

西日本新聞

TAO × 竹田 文化芸術は街を元気にする!

日本の伝統芸能である和太鼓を武器に、世界のエンターテインメントの本場を普集に存在感を増している「DRUM TAO」。その飛躍を支えているのが年前からタッグを組んでいる世界的デザイナーの「コシノジュン」さんだ。今回は2020年東京五輪の文化・教育委員会の委員でもある「コシノ」と「タオ・エンタ・テイメント」の藤高郁夫社長に、東京五輪に向けた挑戦や、互いの相乗効果について語ってもらった。(構成・河合志)

コシノジュンコさんと TAO・藤高社長対談

—お二人の出会いは、

コシノ 12年に「風堂」の河原成美会長を通して知った和太鼓と聞いて少し敬遠したけど、一度公演を見てピンと来た。この人たちの衣装を取って換えたら面白そうだよ。

—どんな変化が、
藤高 先生の衣装は最初「えっ?こんな着るの?」と驚けど見事に計算された左装だ。奇抜で特異なデザイン。の衣装が動きやすく、今

や完全に太鼓と一対になっている。
—「パリコレ」な「世界の第一線」で活躍している「コシノ」さんから見るとTAOさんは、
コシノ 独特のものを持っている。いろいろ研究したり、体感したりして徐々に身に着けた世界観を持っているから絶対的に強い。世界の人にウケようというのが常に頭の中にある。

藤高 日本と世界に通用するものが発見できたと言わ

東京五輪で「和の力」披露を

れるのがうれしい。国内向けの素晴らしいエンターテインメントはあるが海外で評価されるものが少ない。TAOはそうなりたいたい。追求してきた。

コシノ いろいろ見てきたけどどこにも負けてない。TAOの場合もTAOの日常設備を追求していきまます。いいものになると思つても覚めてもTAOねとよく言われる。自分たちのようにハマっちゃうのがいいやないといものはできない。

藤高 世界を回って経験と挫折を味わって、本当に認められるものを追求してきた。五輪という二度とない機会を生かしたい。

コシノ 地城に根付いて結束しているチームワークだからいいパフォーマンスができる。地方から出発したというのが素晴らしい。熊本地震も体験して乗り越えて、だんだんいい顔になっていく。何よりもお客さんが喜んでる。



2020年の東京五輪に向け、「和の伝統を世界に発信したい」と意欲を語るコシノジュン(左)と藤高郁夫社長

婦人の新聞投稿欄「紅血」集
戦争とおおはぎと
グリンピース
書店で好評発売中 ● 出版部

2016年

8月7日 (日曜日)

久住 雅 さんデーリラム

い失敗したら私の責任、一心
同体よ。
—20年の東京五輪では、「日本を世界に発信するかも問われる。
コシノ TAOはものすごくハワリだ。それをどうやって日本全体のオリジナルにするのかが、世界に発信するために今のメンバーだけでなく将来的にも考えてほしい。基本できてはいるから広げていくことが大事。TAOにはどうもか、五輪に関わって和の伝統を世界に発信してもらいたい。

藤高 世界を回って経験と挫折を味わって、本当に認められるものを追求してきた。五輪という二度とない機会を生かしたい。

コシノ 地城に根付いて結束しているチームワークだからいいパフォーマンスができる。地方から出発したというのが素晴らしい。熊本地震も体験して乗り越えて、だんだんいい顔になっていく。何よりもお客さんが喜んでる。

藤高 昔は世界に出て行ってたけど今はいいものを見ても目立たなくなってる。かむしる触発されることが多い。
コシノ TAOは20年かけて磨き上げられたタイヤモンド、石だったものを磨いて磨いて磨いてきた。世界で意欲が高いからもうとっといいものを追求していかけると思

人の「プロポ」はもう進化してきますか。
コシノ 刺激は大事。いろんな人と同じく合うことは意外な発想につながる。フアンクションって西洋のものでしょ。西洋がふれとか、西洋に憧れる時代は終わった。後ろに戻るのではなく、前に進む。和を求めている。だから、自分が生きている理由は和のものをもっと世界に打ち出さないと。意欲がないなど思っている。そういうときにTAOに出会ってタイミングが良かった。自分の経験の中に整理されたものが、これだからパリエーションがこんなに広がっていく。

藤高 昔は世界に出て行ってたけど今はいいものを見ても目立たなくなってる。かむしる触発されることが多い。
コシノ TAOは20年かけて磨き上げられたタイヤモンド、石だったものを磨いて磨いて磨いてきた。世界で意欲が高いからもうとっといいものを追求していかけると思

—今後 TAOとコシノさん

福岡病院

福岡県福津市花見が浜1丁目5番1号
0940(42)0145 代表

精神科 心療内科 内科 歯科

式典と同
ジャネイ
グラジ
館のアナ
1等書記